

「女の言葉」で平和を

折井 美耶子

ノーベル文学賞作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチの『戦争は女の顔をしていない』は、最近漫画版も出されて注目されている。ソビエト連邦時代では第二次世界大戦時に、15歳から30歳くらいの百万人を超える女性が従軍したといわれており、ほかの国のように看護婦や軍医としてではなく実際に現場での戦闘要員であった。『「やっぱり女は」』と言われなくなかった。[...] 男たちよりもっと頑張った」と言う。しかし夏の暑さの中を、男物の軍服で行進する女性たち、その通った跡には砂の上に赤いしみが点々と[...]。そして「半年たって、過労から私たちの体は女でなくなりました」と。大戦に勝利し帰国後、彼女たちは戦争体験をひた隠しにしなければならなかった。「戦地に行って、男たちの中で何をしてきたやら」と言われた。

第二次世界大戦でのソビエト連邦の参戦は、祖国防衛戦争でもあった。しかし現在のロシアにおけるウクライナ侵攻はどう説明できるだろうか。アレクシエーヴィッチの父はベラルーシ人、母はウクライナ人という。ロシアのプーチン政権に同調するベラルーシのルカシェンコ大統領は、国内の進歩的勢力を弾圧、アレクシエーヴィッチも国外に逃れ、ここ十年以上も彼女の本はベラルーシでは出版されていないそうである。

21世紀にはかつてのような侵略戦争は起こらないだろうと愚かにも信じていた目の前で、現実にはロシアのウクライナ侵攻は着々と行われている。爆撃で破壊された町々を逃げ惑う人たち。私には、かつて米軍の機銃掃射や艦砲射撃に恐れおののいた子どもの頃の記憶がよみがえってくる。

「私たちが戦争について知っていることは、すべて『男の言葉』で語られている」とアレクシエーヴィッチは言う。「女の言葉」で「世界の平和」が語られる時代を創り出したいと切実に思っている。



PROFILE

おりいみやこ：近現代女性史研究者。地域女性史研究会前代表。著書に『地域女性史入門』（ドメス出版、2001）、『近現代の女性史を考える』（ドメス出版、2015）、『地域女性史への道』（ドメス出版、2021）。共著に『「青鞥」を学ぶ人のために』（世界思想社、1999）、『「青鞥」人物事典』（大修館書店、2001）、『新婦人協会の研究』（ドメス出版、2006）、『新婦人協会の人びと』（ドメス出版、2009）など。ほか、地域女性史の出版にも携わる。